

A男のコミュニケーションの幅を広げる取り組み ～得意なことを活かした苦手な課題の指導～

神谷みつ江

1. はじめに

A男は中学部3年生である。本人の実態や保護者の願い等からみえてくる課題は、この年齢まで身に付くことがとても難しかったことであるといえる。つまりA男にとって非常に苦手な分野であり、自立活動の時間における指導において、そこだけに焦点を当てて伸ばそうとする指導では成果もあがりやすく、何より本人にとって意欲的になれないということにもなりかねない。14歳という年齢を考慮すれば、得意なことをさらにアップする指導の方が効果的かもしれない。しかし、好きなこと、得意な面をいろいろもっているA男に対しては、それを有効に活かすことで苦手な課題に迫れるのではないかと考え、本テーマを設定し取り組むことにした。

2. 対象生徒

A男 : 中学部3年生

(1) 検査結果 KIDS (平成14年12月 CA12:8)

運動2:4 操作2:6 理解言語3:1 表出言語2:3
概念2:0 対子ども社会性1:1 対成人社会性1:2
しつけ4:0 食事1:9 総合2:0

NC-プログラム (平成16年5月 CA14:1)

視覚操作・聴覚記銘・読字・書字・微細運動の発達年齢は高い
言語理解(大小理解・身体部位等)・言語表出(色名・反対語等)・
数(概念)の発達年齢が低い

K-ABC (平成16年6月1日 CA14:2)

継次処理=同時処理 習得度尺度のなぞなぞ・文の理解は粗点0

(2) A男のコミュニケーション面の様子

- ・自分の思いと違うことや我慢できないことがあると、自分の掌を噛みながら大きい声が出る。嫌なことには「いやーよ」と言う。「～先生、～してください」と言葉での要求が少しできるようになってきた。
- ・食べ物がある場面で「ください」と言葉で伝えられずに手が伸びてしまうことがある。

3. 保護者・担任の願い

(1) 保護者の願い ・色がわかるようになってほしい

(2) 担任の願い ・遊びを通して教師や友だちと人間関係を広げる
・いろいろな経験を通して会話を楽しみ、話し言葉を広げる

4. 個別の指導における年間目標

本人の実態や保護者のニーズ、担任の思いを受けて、「場に応じた要求言語の表出」と、NC-プログラムの検査結果による発達領域の中の未通過項目「大小」「色名」「身体部位」、芽生えがみえる「前後左右」にねらいを絞って、次のように目標を設定した。

- ・大小、前後左右の概念を育む

- ・色名や身体部位名がわかる
- ・活動を通じて場に応じた要求言語をふやす

5. 指導の手だて

(1) A男の得意な面、好きなことを活かす工夫

- ・動作模倣が上手であり、耳から聴いた歌を音程よく口ずさむことを活かして、知っている歌を身体部位名や前後左右の歌詞を織り込んだ替え歌にして、各部分を指すリズム遊びとして楽しく取り組めるようにする
- ・手先が器用であること、見通しがもてる活動には集中して取り組める等の長所を活かして、色を意識できるようなゲームや経験のある手芸活動を取り入れる
- ・くすぐってもらうことが好きで「～先生、肩こちょこちょ（して）」と求めることが多いので、くすぐり遊びもいくつか楽しみたい
- ・文字の読み書きがある程度できるので、必要に応じて文字カードを利用する
- ・好きなスナック菓子を取り入れたティータイムを学習の最後に楽しむ

(2) 指導にあたっての留意点

- ・授業の流れを一定にする
- ・授業の最初にホワイトボードに活動予定を書いて見通しをもちやすくし、活動を一つ終えるごとに消していく
- ・活動において、関連した言葉や「～をください」「～してください」といった言葉を使う場面を多く設定することで使用頻度を高める

6. 1学期の取り組み

授業は、「リズム遊び → ゲーム → ティータイム」という流れで構成した。

(1) 目標

- ①身体部位名や前後左右を理解する
- ②黒・白の色名がわかる
- ③ティータイムの場面で「～をください」が言える

(2) 指導内容

- ①リズム遊びでは、「ホーキポーキ」の替え歌に、頭・目・鼻・ほっぺ・口・耳・首・肩・胸・おなか・へそ・尻・背中・手・足等の身体部位名を盛り込み、徐々に眉・まつげ・舌・あご・腰・ひじ・膝・かかと等を増やしていく。各部分の指さしを歌詞にあわせて教師と一緒にすることから始め、一人でも正しく行えるようになることをめざす。身体部位名をカードから選んで自分で歌詞を構成する選択場面も設けていく。
- ②色を意識するゲームとしてオセロゲームに取り組む。「黒」「白」の色分類や駒の置き方、はさみ方などは導入として指導し、盤上でのゲームにつなげていく。ルールは取り組みやすいように柔軟に考えていく。ゲームを通して色名に親しめるようにする。
- ③「～ください」の言葉を使って、お茶やカップ、皿、台拭きといった道具類を準備したり、数種類のおやつから食べたいものを選んだりする。必要な要求言語が出やすいように言葉カードを用意して手がかりとする。

(3) 評価

- ①リズム遊びは、教師と向かい合って楽しそうに取り組んでいる。指していく部位を順に示したカードを見ながら、教師の歌に合わせて歌詞を口ずさむ。教師の見本がまだ必要なことがある。
- ②オセロの駒の黒と白の色名は理解している。ゲームのルールも徐々にわかってきてゲー

ム終了までかなり集中して取り組めるようになってきた。勝敗の理解は難しい。

- ③ティータイムの場面では、教師に「おやつをください」という言葉での要求が自分からはなかなか難しく、手を伸ばして「A男（にもほしい）」と訴える。時には手を伸ばして食べてしまうことも見られる。「～ください」と書いた文字カードを提示して、場に応じた要求の言葉が言えるよう促している。「お茶ちょうだい」は自分から言えた。

7. 2学期の取り組み

2学期の事例検討会で、A男自身に自立活動での課題がしっかり理解できるよう目標をより絞った方がよいのではという指摘を受けた。また、身体部位名や大小、前後左右の概念については、NC-プログラムの再検査により課題クリアとなったため、10月半ばより短期目標を次の2点に絞って取り組むことにした。

それに伴い、授業の流れを「色の学習 → 手芸 → ティータイム」とし、くすぐり遊びも楽しみとして途中に適宜組み込んでいくことにした。

(1) 短期目標 (10月より)

- ①赤・青・黄・緑色がわかる
- ②活動のいろいろな場面で「～をください」「～してください」が言える

(2) 指導内容

- ①4色のチップを台紙上の色名の文字とマッチングさせていく課題に導入として取り組み、ゲーム等につなげていく。4色のナイフを使う「黒ひげ危機一発ゲーム」やフェルトを使う手芸（A男が経験のある機織り）に取り組む中で、色を選ぶ学習を積み重ねる。
- ②刺し子やアイロンビーズの手芸に取り組む中で、針や糸、はさみ、ビーズ等を要求したり、針に糸を通す、結び目を作る等の手助けを求めたりできるようにする。ティータイムも1学期と同様に引き続き取り組んでいく。

(3) 評価

- ①色チップのマッチングでは、黄と緑の色と色名合わせが不確かな様子が時々みられる。「黒ひげ危機一発ゲーム」では自分でナイフの色を言いながら樽に刺したり、「何色を刺そうかな」と言う教師の言葉に「青」「黄色」と色を指定して手渡したりすることがスムーズにできてきた。ゲーム終了後には、教師の指定する色の順にナイフを箱に片付けていった。機織りでは、織り込みたいフェルトを指さしながら「～色ください」と教師に次々に要求することができた。
- ②刺し子では、「糸」「針」の言葉は文字カードを見ながら言うことが多いが、「ください」の要求語はスムーズに言えることが多い。「糸通してください」「ひも結んでください」という表現もかなり使えるようになってきた。糸をはさみで切りたい場面では「はさみください」と言ったり「先生、切ってください」と言ったりすることがあるが、それぞれの要求に応じるようにした。アイロンビーズでは、カップの中のビーズ10個を盤に置き終わると、次のカップを「ビーズください」と次々要求することができた。ティータイムの準備の際は皿やお茶碗を文字カードなしでも要求できる。お菓子の小袋を開けるために要求したはさみがなかった場面では、「先生、開けてください」という言葉に言い換えて要求できた。自分の菓子を食べ終えた後に、教師の菓子に手を伸ばして素早く口に入れてしまったことが一度あり、好きな食べ物がある場面での言葉での要求にはまだ難しさがあるといえる。

8. 指導を振り返って

A男自身が見通しをもって意欲的に取り組める活動を通して、言語表出としての色名等や要求言語としての「～をください」「～してください」の学習を積み重ねてきて、自立活動の時間においてはある程度の成果がみられたと捉えている。ゲームにじっくり取り組んだり、鼻歌を歌いながら手芸に取り組んだりしているA男の姿に、好きなことを教師とともに楽しみながら、得意な面を活かして自信をもって活動に取り組むことが、必要な言葉を理解し、主体的な発話を促し、会話を育むことにつながるのではないかと思える。しかし、生活面での汎化という点はなかなか難しく、たとえば学部での集団学習の場面で、おやつを分けてもらうのが遅くなったA男が、友だちの持っているおやつをパッと取り上げる姿がみられたことがあった。「ください」を実際の場面で使うことがいかに難しいか痛感させられる。

苦手な課題については、検査結果では言語理解・表出面の「大小理解」「色名」「身体部位名」だけではなく、「反対語類推」「形容詞理解」「語頭音」「文章説明」また、「なぞなぞ」や「文の理解」といった項目もあげられる。しかし、A男の言語面の実態を考えると後述の項目についての理解は非常に困難であると推測できたため、積み重ね学習の成果が期待できる前述の項目を目標として設定した。大きい、小さい、あるいは身体部位名等は、日常生活の中でも耳にしたり多少理解していたりする部分である。また、色についてもA男は、色名との合致は確実ではないものの「ピンク」「青」といった言葉は知っているという実態があった。苦手なことといっても本人の実態を考慮した、より指導の効果が望める部分に迫ることが大切であろう。

9. 自立活動の今後の課題

自立活動担当者での事例研究会が定期的に行われていることで、A男についてもじっくり、様々な視点から理解し捉えていくことができた。複数の教師の視点で自立活動の指導を考えていくことはやはりとても有意義なことである。

自立活動での取り組みは、他の生活場面でも活かされることが何より重要である。著者としては少しでも本人のコミュニケーションの幅が広がることを願って、自立活動の時間だけでなくできるだけ支援場面を増やすよう心掛けてきた。たとえば毎朝のリズムタイムでのリズムダンスやストレッチ体操、グループでのジグソーパズル学習や数学、職業・家庭の授業などである。休み時間にはA男と「いっほんばし こちょこちょ」とくすぐり遊びをし合うひとときもふえてきた。しかしながら、言語の獲得や定着は一人の教師の対応だけでなく、学級担任やまわりの教師と共通理解した上での適切なかわりがあり、それが積み重ねられることで促されていくものであり、根気よい指導の継続が求められる。そのためには教師間や家庭との連携が欠かせない。指導に関するまわりとの連携という点では、著者と学級担任やグループ学習担当者等が話し合う機会を時間的に十分に設けられなかったことが反省点の一つである。このことについては、それを補う手だての工夫が必要であり、より積極的な取り組みが求められる。

さらに、このことは学校全体としても自立活動と他の生活場面との有効なつながりを図るという点で、重要な課題であるのではないだろうか。たとえば、大学の教官を交えて行っている自立活動事例研究会へのより多くの教師の参加、自立活動担当者と学級担任との記録ノートの交換等、無理のない形で行えることを検討し、今後の指導に活かしていくことが望まれる。